医療系大学での
コロナ対応授業と実習

札幌市医師会
北海道医療大学リハビリテーション科学部理学療法学科
青木（あおき）　光広（みつひろ）

北海道医療大学では６学部９学科、すなわち薬学部、歯学部、看護福祉学部、心理科学部、リハビリテーション科学部、医療技術学部の学生を受け入れており、各研究科の大学院生を含めると約3,500名の学生が在学している。学生の多くは当別町、あいの里地区、ならびに北区から学園都市線にて通学している。教員と事務職員を合わせると約600名であり、半数がJRで通勤している。私が所属しているリハビリテーション科学部は理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を養成し、それぞれ380名、190名、250名が在籍している。４年制のため、臨床実習は１学年より４学年まで、合わせておよそ20週間の提携病院リハビリテーション科での学外実習を行い、それぞれ病院に約250名のメディカルスタッフ臨床講師を委嘱して、学外実習を行なう。医学部での臨床実習と異なる点は、在学期間が短く、また卒後すぐより患者対応を行うため、卒後研修制度が十分行なえないこともあり、医学部でいう卒後研修を兼ねた臨床実習を在学中に行なっている点である。すなわち、卒業して比較的短い期間で患者さんに運動療法や作業療法、言語聴覚療法を施術することができる知識と技術を在学中に習得させている。

理学療法士や作業療法士の卒業生が増加している近年でも、少なくとも、コロナの流行前にはこれらの臨床実習制度は機能していた。コロナの流行が始まり2020年４月に緊急事態宣言が出されてからは、座学は全面的にオンライン授業に変更となり、実習も中止となった。緊急事態宣言が解除されたのち、本学では、敷地が広く校舎内の教室も多数利用できたため、早急なインフラの整備により座学の授業は51の教室で行ない３蜜を回避するべく半数が登校し半数がオンラインとする授業形態を採用して座学の授業が継続されたため、学生がお互いに顔を合わせたことがないというような、学園生活最大の利点を失うことはなかった。

しかし、臨床実習は別であり、提携していた札幌市内あるいは道内地方都市の病院、あるいは老人保健施設では、学生の受け入れが中止され、実質的に、ごく一部の期間を除いて、大部分の実習は学内で実施されることとなった。学生や教員が相互に患者やセラピストとなり、それぞれの分野の教員毎に独自の模擬実習を組んで対応している。通常の学外病院臨床実習の場合、１名のセラピスト教員が２名の学生を担当するが、学内実習の場合５名から10名の学生の対応が必要となり、教員の負担は急激に増加している。今年度で学内実習が２年目となり、教員の中には疲労の色が濃くなっている者も出てきている。また、学生の立場に立つと、彼らが実習で最も体験すべきこと、それは、病院という医療社会で生きてゆくことであるが、それができていないのが現状である。病院での実習生の受け入れにはPCR検査陰性の証明が必須であり、実習前に14日間の健康状況調査で異常なしとの記録を提出している。それでも、病院によっては、実習学生の受け入れが困難な場合が多数出ている。実習の機会はすべての学生に平等に与えなければならず、一定数以上の病院の受け入れができなくなると、全体としての実習が出来なくなるのは、辛いことである。また、刻一刻と変わる感染発生状況に対応して、実習スケジュールを何度も練り直して対応している教職員に頭が下がる思いである。

本学では、６月21日より全国に先立ち学生と教職員に職域ワクチン接種が始まっている。しかし、大学によってはワクチン接種の目途すら立っていない場合も多い。医療関係者のみならず、少なくとも、学生と教員には速やかなワクチン接種が行われることを期待している。３蜜回避のためクラブ活動は全面的に禁止され、学生の交流が萎縮している現状がある。家庭内やアルバイト先でコロナに感染した学生が、２～３週間に数名発生し、そのクラスの座学授業は一定期間全面的なオンライン授業となっている。これまで、学外実習体験の補填のため学内実習を続けてきたが、教員のコロナ罹患がほとんどなく、危惧していた学内クラスターは発生せず、何とかここまで実習ができてきたことが不思議である。この場を借りて、努力を惜しまない教職員の姿に、エールを送りたい。デルタ株ウイルスが広がり予断を許さない状況であるが、職域ワクチン接種が完了し、感染対策を十分に行ないつつ、学外臨床実習が行なえる日が来ることを願っている。